北越雪譜 二編 四卷

越後 鈴木牧之編撰
京山人百樹增修
江戸 京水百鶴畫圖

天保辛丑新刻
書肆 萬笈閣
發販

北越雪譜二編叙

北越 鈴木牧之

雪譜六卷裁後塩澤鈴木牧之老人
雪窗囲炉寒燈隱几隨筆甚事出實脚
徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣
嚮者郵筒懇乞校正落之戈刈蕪蔓擦擷著
英先輯二卷以為初編告翁使書肆文溪堂刊布
之於後越雪之奇千彙萬狀供郎遊資錦室
婦妾和客妻娣以詳知裁靈解士通人或云

北越雪譜 二編 四卷

越後 鈴木牧之編撰 天保辛丑新刻

京山人百樹增修 書肆 萬笈閣

江戸 京水百鶴畫圖 發販

北越雪譜

雪譜二編叙

雪譜六卷越後塩澤鈴木牧之老人雪窗囲炉寒燈隱几隨筆甚事出實脚徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣嚮者郵筒懇乞校正者数刈萋萋掇擷菁英先輯之巻以初編告翁使書肆文溪堂刊布之於後越雪之奇千彙萬狀供郎遊資錦室婦妾弟妻娣姒裁霧解士通人或云

格致之一助爰以雪譜之名頗踴躍於是乎書
肆頒乞嗣撰蓋以邪正之殊稿在也余謂不踏越地
不可說越事仍丁酉之夏携乃兒京水越遊數
十日有紀行作再採數條刪補芻之殊稿以存二
編稿定將置序言詹嗔者晩妻連日放晴紅酣
綠戰花神睡壯遊心勃興欲治賽成田山感怒王祠
以療鍾毛之痾矣夫成田山香火之盛世之所知也凡
自江戸到成田者抵小網街橋岸買搭船水路直
往行德都人皆以捷徑蓋行德一市會也不必成
田者火者搭船常盡列于橋岸待行客是以俗呼
茲岸云行德河岸呼茲船云行德船余亦脇坐
搭船其所借載者多是庸男雜沓猥褻衆口喋
嘈余傍在一僧一士一商僧年齒七十許從一童伯
士可二十四五詩嚢頗俊殆似學究商者老樓撞
市樣相俱接膝余籍默不敢出一語凡屋漸老萎
芽蕓櫻去浮蜜嫩柳吐姆村落春景百運如画

蹴水行之會心也船既過半余庸卑多就賦
嘈之自羅寇之可慌壯士出墨斗持懷橘竟句果
是書生也老僧以鬚鍵鏡披書士閣筆曰尊者所
執是何書僧曰北越雪譜士曰僕嘗淡之先國冊子
何足閲僧曰貧苦一錫西干北親知越雪故特購之
借以續矣今閲京山人序彼少識字乎士曰否之況
夫京山者文場之奴隸藝苑之儳僬也近年隨藩
子稗史院本之泥中汚塗姓名遂不能脫甚寡窟
雖然彼自爲李漁金人瑞之流亞文家爭訴
之乎僧哈然笑而不應余佯聽閔之商已將曰鄙人
書賈也能識刊行之趣凡上梓之書不論編輯之荒
誕与詞章之奇雋多闡爲大著述奉之作
者而搖鉢樹翁雖咸服韻士我書甚不堪嚥
而不顧是書捧之通義書賈之常態也北越雪譜
初編之梓一舉販七百餘部刷板裝本亟不暇給
板二編刻步光蒙有近矣士不然甚言稍吝不止

鼓掌頻敲僧手釋老曰論說姑置足下識京山
乎否士曰不識僧曰我十年去与彼會於一粒
舍僅得一面識不為無因緣於拍余背月
曰京山老人醒眠長久忘我独余拶然不得應時
船客行懷之岸舟中之人皆上岸不復繁叨吐欸
于茲矣少纔乞言於逆旅燈下以為序云

天保十一年庚子潔斉　京山人百樹并書

雖然彼自為李漁金人瑞之流亞文客爭許之乎
僧唖然笑而不應余佯瞞閉之商已姆曰鄙人書愛也
能識刊行之趣凡上梓之書不論編輯之荒誕與詞
章之奇儁只要鬻為大著述奉之作者而碩学鴻
儒雖感服韻士称書苦甚不貴嗜而不顧是書歸之
通義曹耦之常態也北越雪譜初編之梓一舉販七百餘
部刷板裝本至不暇給故二編刻後兄益有近矣士
不然其言洞香不止鼓掌頻敲僧手釋卷曰論說姑置

足下識京山子否士曰不識僧曰十年前我与彼會於一粥舍僅得一面識不為要因緣言畢遽於拍余肩曰京山老人暇時長兄忘我歟余埒於不得應既船著行德岸舟中之人皆上岸不日纜吻吐歇于茲廿夕經五宿言於逆旅燈下以為序云

天保十一年唐子潔月

京山人百樹并書

岩瀬百樹

北越堂

譜二編凡例

此書全部六卷牧之老人が眠を驅の漫筆梓を俟ざるの稿本あり故小走墨翰写一圖も亦艸画あり老人余小示して校訂をもふ因て其駁雜を刪り校訂清書一圖ハ豚児京水小画一りの三卷書賈の請小應じ老人小告て梓を許し以世小布し小發販一舉して七百餘部を獲る是小依て書肆後編をもとめ然ども余が机上它の編筆小忙く屢稿を脱る期約を失ひ且近日務て老人が稿本の殘冊を結び以其もの小授く

牧之老人小越後の聞人なり書貞久利實を以聞え屢縣監の褒賞を拜して氏の國称を許る住計の餘暇風雅を以四方小交る余が亡兄醒来京傳の別号翁なる鳴書の友なりしかも余亦是小嗣ぐ老人余小越遊を奬ること幸なり余固山水小耽の癖あり而も小遊心動くことなる事小約て果さず丁酉の晩夏遂小豚児京水を從へ啓行せ始小越後の諸勝を尽さんと思ひ越地小入て後年稍漫して穀價貴踊

人心穢濁ものを忘れ越地を踐こと僅に十ヶ年ありきつとども旅中に於て耳目を新にせゝ事を挙て此書に増修を百樹曰とゝふりの是ゝ

前編に載る三國嶺の圖は牧之老人が草画に倣て京山私儲滿山の松樹を画り余越遊の時三國嶺を踰しに此嶺はさゝなりの前後の連峰をべて松を見ど此地にはぎゝなど越後は松の少き國なり三國嶺を知る人は松を画ゝを笑ふ

ゝ是老人が本編の誤なり非ど京水が蛇足なり

山川村庄はさゝなり凡物の名の訓ゝ清濁によりて越後の里言にたがひさるもあるべし然ども里言は多く俗訛なり今姑俗に従ふあり本編は音訓の假名を下さゞるなりけは余が所為なり謬を本編に聽こと勿れ

余也固浅学にして多く書を不讀寒家にして書に不富に藏せる屢祝融に奪はれて架上蕭然たり依之増修の説に於て此事は彼書に見ゝと覚る其書を藏せざるこゝは急就の用に弁せど纔瘙痒なるが多ゝ且浅学なるべし引漏

ゝるも最多るべし

本編雪の外它の事を載るは雪譜の名を空うするに似ゝこゝ姑記ゝて好事の話柄に具を増修の説も亦然り

雪の奇状奇事其大槩は初編に出せり猶軼事有を以此二編に記を已に初編に載るる事の異なるは不舍して之を録を蓋刊本は流傳の廣きものゝ初編を讀ざる者の為にもるの意なり前後を讀人其曾見重出を詰こと勿れ

釋の字釈に作の外澤を沢驛を駅に作は俗なりきつとども巻中驛澤の字を姑俗に従ふて駅沢に作り以梓繁を省く餘の省字は皆古法に従ふ

巻中の画老人が搨本の艸画を真に或は京水が越地に写ゝ真景或里人の話を聞ゝ圖に作りるもあり其地に照ゝて誤を責ることなかれ

老人編を嗣の意あり也なれば初編二編とゝふ前編後編とゝふべ

天保十一年 庚子仲春

京山人百樹識

一之巻 目録

越後の城下　古哥わる旧蹟　雪の元日
雪の正月　玉栗。羽子櫂　雪咲小焼飯を賣
雪中の戯場　家内の氷柱　雪中の用具
輜の説　寒氣の力　シガ
夏の雪　削冰　雪の多少
浦佐の堂参

通計十六條

北越雪譜二編 巻一

巻之一　越後塩澤　鈴木牧之編撰
江戸　京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古ハ出羽越中ハ距リ一事國史ハ見ル今ハ七郡を以テ一國トス東ハ岩船郡（古ハ石ハ作る海ハ）蒲原郡（新潟の湊此郡ハ屬ス）西ハ魚沼郡（海ハ遠シ）北ハ三嶋郡（海ハ近シ）刈羽郡（海ハ近シ）南ハ頸城郡（海ハ近キ処アリ）古志郡（海ハ遠シ）以上七郡也

城下ハ岩船郡ハ村上（内藤侯五万九千石）蒲原郡ハ柴田（溝口侯五万石）黒川（柳沢侯一万石陣営）三百市（柳沢璋正侯一万石陣営）三嶋郡ハ与板（井伊侯二万石）刈羽郡ハ椎谷（堀侯一万石陣営）古志郡ハ長岡（牧野侯七万四千石）頸城郡ハ高田（榊原侯十五万石）糸魚川（松平日向侯一万石陣営）以上城下の外頸豊饒を為ス処魚沼郡ハ小千谷古志郡ハ三条三嶋郡ハ寺泊。出雲崎　刈羽郡ハ柏崎　頸城郡ハ今町　蒲原郡の新潟ハ北海第一の湊ニシテ福地たり

支論を俟ぞ此餘の豊境ハ姑畧せ此地皆十月より雪降るその深と浅とハ地勢ふよる猶末ふ論ぜり

○古哥ある旧蹟

蒲原郡の伊弥彦山弥一作夜伊弥彦社を當國第一の古跡とせ祭るところの御神ハ饒速日命の御子天香語山命なり　元明天皇の和銅二年の垂跡とせ社領五百石此山さのゝ高山ゆもあるぎとど越後の海濱八十里の中わどふ独立して山脉いづゝの山つもつゞぞ右ふ國上山左ふ角田山を提攜して一国の諸山是ふ對して拱揖もるゞ如くいづゝの山よりも見えて實ふ越後の鎮ともうるぐき山ハ是よりわるゆハあるゆゝどとるさゝびとせ命もて小垂跡ましまさとせ此御神の縁起或ハ灵験神宝の類記せぐき支あまゝとあまゝども姑こゝふ省○さて此山をよゝる古哥ふ万葉「いや日子のおのゝ神さび青雲のたなびく日もゝふ小雨とやふる」又家持ふ「いや彦の神のふと

ふけ」もらかのこゆもゝんかゝのきぬきてつぬつゝ」▲長濱　頸城郡ふ在り三嶌郡とも説もあり家持の哥ふ「ゆきふる雁のつぎきを休むてふとゝや名ふあふ浦の長濱」▲名立　同郡西濱ふあり今ハ宿の名ふよぶ　順德院の御製ふ兼久の宮ふ佐渡遷幸の時ふ「都をぞさゝゝ出ゝ今宵ゝもゝ身名立の月を見る哉」▲直江津　今の高田の海濱をいふ　同御製ふ「ゆけバ聞きけバ都のこゝふ此里もぎよ山わてぎゝ」▲越の湖　蒲原郡ふ潟とよぶ処多ゝ里言ふ湖を潟とふふその大なるを福嶋潟とふふ四方三里計此潟ふ達ゝびゝて五月雨山あり貫之の哥ふ「潮のゞる越の湖近けゝバ船もゝまゝ来ふりゝ」又俊成卿ふ「恨てもうゆゝもせんあゝでのゝ越の湖をゝるゆゝけゝバ」又為兼卿「年をへてつゝし越の湖ハ五月雨山の森の雫」▲柿崎　頸城郡ふある駅　親鸞聖人の詠玉ひゝとゝ口碑ふ傳ゝゝ哥ふ「柿崎ふ宿をゝとゝゝふ主の心ぎゆゝゝゝりけり」按ぞるふ聖人御名を

善信とかて三十五歳の時諸口小係りて越後小謫する時小承元元年二月のり後五年を經て勅免あり法を弘ん為に越後小いまし〻こと五年のり故小聖人の旧跡越地小殘まり弘法廿五年御歳六十の時洛小飯玉越後小五年下野小三年常陸小十年相模小七年と弘長二年十月廿八日遷化壽九十歳件の柿崎の哥も弘法行脚の時の作なるべ〻

此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原なども古哥あまたども他國小もおのゞ名所あまたたゞ小越後ともさだめ〻

さて今を去る天保十子のとし五百四十一年前永仁六年戊のとし藤原為兼卿佐渡へ左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ〻間初君とのゝ遊女をめ玉ひ〻小初君が哥小「ものおもひ〻路の浦の白浪も立くるひあり」とこたきけり此哥吉瑞とのりてや五年たちその内嘉元元年為兼卿飯洛あり〻九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君が件の哥を入

まらるゝ玉へり是を越後第一の勝事とし初君が古跡今寺泊小在り里俗初君屋敷とのゝ貞享元年釈門万元記とのゝ初君が哥の碑あり〻しが断破〻を享和年間里人補修〻て今小存せり

○雪の元日

凡日本国中小於て第一雪の深き国小越後のりと古昔も今も人のゝ事のり志るとども越後小於も最雪のふかきこと一丈二丈小おゝぶ小我住魚沼郡のり次小古志郡次小頸城郡のり其餘の四郡小雪のつもる夏三郡小比をゝゞ浅〻是を以論ずゝ我住魚沼郡小日本第一小雪の深降所のり我その魚沼郡の塩沢小生まゝ毎年十月の頃より翌年の三四月のころまで雪を視事已小六十余年近日此雪譜を作るも雪小竈居のもとゝのり。さて我塩沢小江戸を去ること僅小五十五里のり直道を量べのゝ近るべ〻雪のふる時のゝ健足の人小四日のゝ小江戸小

いとるべし其江戸の元日を聞バ稲神朱門の夏ハ市中ハ千門万戸千歳の松をかざり直なる御代の竹をたて太平の七五三を行さふ新年の賀客麻上下の肩をつらねて往来をふ万歳もうちまじりまつ女太夫とり鳥追ひの三味線ふめでたき哥をうたひ娘の児のやり羽子男の児の凧鳶見るものの聞ものめでたきうふ初日影花やふさ〳〵昇る實ふ新玉の春とこそいへけれ其元日も此雪国の元日も同じ元日なれども大都會の繁花と邊鄙の雪中と光景の移りかはる事雲泥のちがひなり ○そもそも我里の元日野も山も田圃も里も平一面の雪ふ埋り春を知ずして庭前の梅柳の類も去年雪の降ざる秋の末ふ雪を厭ふ九太夫豆ふ縄縛ふ過るまゝ雪の中ふわりゝ元日の春をむかへさるバ人も三四月ふいたりてはじめて梅花を不見菊ゞ匂ふ春も稍景色とりの八月と梅と冷ぜ〳〵ハ大都會の正月十五日なりまさ

山里ハ万歳遅〳〵梅の花ハ邊鄙の三月なるべし門松ハ雪の中に建七五三なるぎりハ雪の軒ふ引ハ礼者ハ木履をそき従者ハ藁靴なり雪徑ふ階級なる所ふいたるバ主人もはだしなるべし此げたをはくべしハ礼者ふうぎ〳〵ど人〳〵皆ちり雪全く消る夏のそなめふいたるべし草履をはく事なるべし元日の初日影も惟雪の銀世界を照そのまゝ一ツとして春の景色を不見古哥ふ「花をのみ待らん人ふ山里の雪間の草の春を見せばや」とハ雪浅き都の事なり雪国の人ハ春ふ〳〵春を待ちかねるをもつて生涯を終ることをもとハ繁栄豊腴の大都會ふ住〳〵年〳〵歳〳〵梅柳嫩色の春を楽む事實ふ天幸の人といふべし

○雪の正月

初編ふもいへる如く我国の雪ハ鵞毛をうたハ稀なり大ハ白砂を降ものゆゑ〳〵冬の雪ハさ〳〵ふ凝凍とゝなり春ふいたるとゝ鉄石のごと〳〵

文錦堂蔵

文錦堂蔵

冬の雪のとろ〳〵ぞろハ湿氣ありて乾たる沙のごとくなるゆゑなり是暖国の雪ハ異処なり去ることとろ〳〵なるハ雪解ともるのそゞやうなり春ふりつゞきて年ふりてハ雪の降ること冬ふかゝるほども積ること五六尺ハ過ぎず天地ハ陽氣有を以なるべきさゝ年ハ春も屋上の雪を掘ことあり掘ハ掬の木ゆゑ作りたる木鋤ハ土を掘ごとくして取捨るを里言ハ雪を掘と云ハ初編ハ云ハ掘ハ雪の重ハ屋を潰ゆゑなりされバ旧冬の家毎ハ掘除る雪と春降積る雪と道路ハ山をなすこと下ハ雪らるを圖をなしてもるべしいづれの家ハても雪ハ家よりも高ゆゑ春を迎ふる時ハ日光を引んとあふ明をとる処の窓ハ遮る雪を他処へ取除るなり然るハ時とハ一夜の間ハ三四尺の雪ハ降うゞめらるゝ家内薄暗心も朦〳〵として雑煮を祝ふことあり越後ハさゝ

北国の人ハまゞ〳〵雪の中ハ正月をもてハ毎年の事なれ〳〵正月ハ暖国の人ハ又せて〳〵ぞ〳〵

○玉栗

江戸の児曹ハ春の遊ハ女児ハ羽子擡男児ハ紙鳶を揚ざるハ我国の子どもハ春ハ雪ハ前ハ〳〵ぞ〳〵地として雪ハ〳〵ざる如なけれバ歩行ハ苦〳〵路上ハ遊を事少〳〵ふ玉栗と云ハ児戯あり春ハ雪中のわもびん始ハ雪を固成る雞卵の大さハ握りあり其上〳〵と雪を幾度もけ〳〵足を踏堅めハ柱ハあて壓堅ることを肥と云さて手毬の大さハ有りたる時他の童ハ作りたる玉栗を庇下ハ置しゆ我ハ玉栗を以他の玉栗ハ打〳〵強き玉栗弱き玉栗を碎〳〵を勝負を爭ふ此戯所ハ〳〵。コンボウ。コマ。地獨楽。雪玉の里ハ雪を〳〵ぞゴ。玉ゴシヨ。勝合ハ〳〵ぞ〳〵此玉栗を作ふハ雪ハ少〳〵

塩を入るれバ堅くなること石の如し ゆゑに小児互に塩を入るを禁ずるなりとぞこれを以ておもふ時ハ塩ハ物を堅むる物なり物を堅實にするゆゑ塩藏にすれバ肉類も不腐朝夕嗽に塩の湯水を以てすれバ歯をかたくし歯の命を長くすといへり玉栗ハ児戯なれど塩の物を堅むる證とするにたれり故にこゝに記せり又童のあそびに雪ン堂といふ事あり 初編にしるせり

○羽子擢 我里俗に羽をつくといはずよくを へもといへうちへものなるべし

江戸に正月せし人の話に市中ゆきゝ見上るばかり松竹を飾るのみに美しく粧ひたる娘たち彩る羽子板を持て並び立て羽子をつくさまいかにも大江戸の春なりとぞ我里の羽子擢ハ邊鄙といひなかなかかゝる艶姿にあらず正月ハ奴婢どもゝ少しハ許て遊をさせしむるゆゑ羽子を擢んとてまづ其処を見たてゝ雪をふみかためて角力場のごとくになし羽子ハ溲疏を一寸ばかり筒切になしこれに鶏雉の尾を三本さしいるゝ

江戸の羽子に比ぶれバ甚大なりこれを擢に雪を掘木鋤を用ふ力にまかせて擢ゆゑに空にあがる事甚高しゆゑに大なる羽子ゆゑに童ハまじらずあらくれたる男女うちまじりてきそひつくなどにて此戯をなせなり一ッの羽子を並びたちてつくゆゑにあやまちて取落したるものハ始に定ありてあるひハ雪をうちかけ又ハ頭より雪をあびせるその雪襟懐に入りて冷に耐ざるを大勢が笑ふ窓よりこれを視るも雪中の一興なり京傳翁が骨董集に上編ノ下 下学集を引て羽子板ハ文化十二年より三百七十年ばかりの前文安のころよりありしものにてそれよりもなほさきにありし事ハ詳ならずといへり又下学集にハ羽子板にハゴイタ コギイタと両かなをつけたれバこぎの子といふも羽子の事なりとあり我国にも江戸の如く小児女のまねをつく所もあり

○雪吹に焼飯を賣

文溪堂藏

雪国ハ寒燿物ハ冬の。雪吹。ホウラ春の雪頽なり此奇状奇事已ハ初編ハもいりさまざま一寺談を聞るゆゑこゝハ去て暖国の話柄とせ ○そも〳〵金銭の貴こと魯氏ゞ神銭論ハ尽し難なゞ今さらいふべくもあらぬ年の凶作いとゝ事ハ臨て餓ハいふる時小判を舐て腸ハ彭張ぜ餓死する人の懐ハ小判百両五十余年前の饑饉の時或所ハ〳〵餓死して人ありしときゝぬ○こゝハ我ゞ魚沼郡藪上の庄の村より農夫一人柏崎の駅ハいふる此路程五里計なり途中ハ〳〵一人の苧繰商人ハ遇ひ路伴ハなりて往けり時ハ十二月のそゞめなりしが数日の雪も此日晴て夜ゞ両人寝をなべて心朗ハなるの〳〵已ハ塚の山とゆの小嶺ハさし〳〵かゝり時雪国の恒なる晴天俄ハ凍雲を布暴風四方の雪を吹散して白日を覆ひ咫尺を弁ぜゞ袖襟へ雪を吹入て〳〵全身凍て息もつまるまで大風四面よりふきたりて〳〵雪を渦ハ巻揚る是を雪国ハ〳〵雪吹とゝの此ゞきハ不意ハあるものゆゑ晴天とゝ〳〵ども冬の他行ハ必蓑笠を用ることゝ我国の常なり二人ハ橇ハ雪を漕ハ雪ハあるひを互ハ声をとゝけて〳〵助あひ辛ゞ嶺を逾るハ商人農夫ハ〳〵ゆ今日の晴天ハ柏崎まゞハ何ともいふべし也ゆゑ弁当をとりてゞ今空腹ハもゝんゞ寒ハ堪ぎかゝて貴賤ハ伴て〳〵雪を漕ことなりもゞさゝぜんの話ハもゝさゝゆの懐ハ弁当ありしときゝぬ夫を我ハ与へなまゞ惟ゆハ貧ゞしゝハ銭六百あり死ゝ活ゝの際ハいふりて此銭を何ハもせん六百ゆ〳〵弁当を賣玉へとゝの農夫ハ貧乏の者なりしゆゑ六百ときゝて大ハよろこび焼飯二ツを出て〳〵六百の銭ハ暮けり商人ハ懐ハありて温のさめざる焼飯の大なるを二ツ食して〳〵雪ハ咽を潤して〳〵精心健ハなり前ハもゝんゞ雪をこゞけり○かゝていをぐるゞハ雪吹

きもゝ〜甚〜棧を穿ゆゑ道遠く日も已小暮ゆんとそ比時小い
とり〜燒飯を賣る農夫ハ肚減て労と商人ハ燒飯小腸満足をそ
めく往農夫ハ屢後るゆゑ終小ハ棄て独先の村小ひとりもるべの家小
入り〜炉辺小身を温め酒を酌始め〜蘇生するおもひをなしけり
○さて志ぐ〜ありてゆくゆく〜と呼声遠く聞るを家内の者きつけ
けをもふこゝ人小ハ雪中の常ゝ雪吹倒るゝ故助けよとて近隣の人をも
よび集め手毎小木鋤を持り〜木鋤を持ハ雪小埋りし雪吹たゝの雪国の常ゝ走行ゆく
あり〜大勢のうの一人の死骸を家の土間へ舁入れ〜をうの商人を立寄
ゝ人ゝ最前燒飯を賣る農夫なりしゝぞもの芋燒商人或時余が
俳友の家小逗留の話小件の事を語り出し〜彼時我六百の銭を惜
燒飯を買ぞんハ雪吹の中小餓死せんこゝろの農夫ゝ如〜なるべ〜今
日の命も銭六百のうちなりゝ〜笑ひ〜と俳友ゝ語りゝ

○雪中の戯場

五穀豊熟〜〜年の貢も心易く捧げ諸民鼓腹の春小遇し時
氏神の祭ゆゑ小遭〜を幸小地芝居を興行する支あり役者ハ皆
其処の素人あるひハ近村近駅より来るなり師匠ハ田舎芝居の
役者を傭ふ始小寺ゆゑ〜群居〜狂言をさゞめく〜のちそゝ〜の
役を定む此群居の議論紛〜として一度中〜果〜なる支あり事定
りてのち寺小於て稽古をそゝむ枝熟〜てのち初日をさゞめ衣裳髪
のるゝハ是を備を一ツの業とするのあり〜物の不足ゆ〜此芝居
二三月の頃なる事あり此時ハいまゝゞ雪の清ぎる銀世界なりさゝゞ
芝居を造る処此役者等ゞ家ハさ〜なり親類縁者朋友より人を
出し〜あるひハ人を傭ひ芝居小屋場の地所の雪を平らふ小踏かゝめ
舞臺花道楽屋桟敷のるゝをゞく皆雪をあつめてその形小つくり

ありとく造ることと下の圖を見て知るべし此雪ゆく造りとる物天又人工をたとへて一夜の間ゆ凍く鉄石の如くゆるゆるとゆるど大入ゆてもさぶきの崩る氣づかひなし孫生の頃ハ雪も中稀なるべ春色の空を見く家毎ゆ雪圍を取除るところなるべ処くより雪かこひの丸太あるひハ雪垂くく茅ゆく幅八九尺廣さ二間だりゆつくりとる簾を借あつめくきべての日覆とゆるとぶくく花をちくハ雪ゆて作りとる上ゆ板をゆくぶる此板を一夜のうちゆ冰つきくく釘付ゆきるとりも堅し曖国ゆ比べべ論の外ゆり物を賣茶屋をも作るいづるの処も平一面の雪ゆるべ物を煮処ハ雪を窪め糠をちくく火を燒バ雪の解ざる事妙なり○さて戯場の造作成就してもの春の雪ゆりつづくく連日晴を見ぞ興行の初日のびる時ハ役者ゆなりとる家ハさくく此ものを見んとく諸方ゆ逗留の客多くく毎日空をゆぶめて晴を待るべ客のゆて

ゆくもちつくくく殆倦果終ゆハ役者仲間いひあくも川の冰を碎て水を浴千垢離して晴を祈るもをり

百樹曰余丁酉の夏北越ゆ遊びく塩沢ゆ在し時近村ゆ地芝居ありと聞く京水と俱ゆ至りくゆ寺の門の傍ゆ杭を建て横ゆ長き行燈あり是ゆ題して曰　當院屋根普請勧化の為本堂ゆ於て晴天七日の間芝居興行せ　もるものゆり名題ハ假名手本忠臣藏役人暫名とありく役者の名多くハ寝名ゆり寺の門内ゆハ假店ありく物を賣り人群をゆる芝居ゆハ假ゆ戸板を集く囲とる入り口ありてゆ守る者ありて一人前何程ゆ價を取とる屋根普請の勧化ゆり本堂の上り段ゆ舞臺を作り掛左ゆ花道あり左右の桟敷ハ竹林簀薦張ゆり土間ゆハ薦を布延をゆくぶ旅の芝居大槩ハかくの如くと市川白猿ゆ話

雪中演場を造圖
雪
地上
昔雪
南

雪国は樓
桐ふ〜
画者不
知〜
ゑうけり
寺

ふもきぬ桟敷のこなたかなたとふ欽然やうみ毛氈をうけうしろふ彩色画の屏風をたてまはけるのさまとなりて四五人の婦ともる綿帽子もちるふ邂逅ふ古風を失ざるを観人群をなして大入なるべ猿の如き童ども樹ふのぼりてなるもあり小娘ども筇を提て冰こをとりて土間の中を賣る筇のなかへ木の青葉をもきて雪の冰の塊をうる茶を賣ものさを氷を賣るふ甚めづらし氷のこと削氷の條ふらんで○さて口上いひ出て寺へ寄進の物あるふ役者へ贈物餅酒のるる一人の名を挙品を唱て披露す此処忠臣蔵七段目をもじりといひて幕開おかるふ拵ふ岩井玉之丞とて田舎芝居の戯子なるべ頗る美なり由良の助ふ拵ふ余ども旅中文雅を以識人なり年若なれば かるる戯をもうるべ常帰ふ入りて今の坂東彦三郎ふ似たり投ち又観ふ足り寺岡平右エ門ふなりしふ余ども客舎ふきたる蒐頭なりとも常ふかなりて関三十郎ふ似て音声もまた天然と関三の如し余京水と相顧て感ず京水ふもふイヨ尾張屋と誉けるが尾張屋ふ関三の家号なる事通じがたきや尾張屋といもるものひとりも一幕ゆるんとせず守る者木戸をいでぬ便所ふ寺の後ふあり空腹なるべ弁当を買玉へ取次やさんとふ我のこふあるべ人も又いでぬとおもふふ人散ば演場の蕭然を厭ふもなるべしいがくゆる出所あるんと尋ふ此寺の四方塀をめぐりて出べきの隙なし折ふ童ども外より塀をめぐりて入りたるもの穴より両人くぐりいでふこともまた可笑一ツゆゑなり

○家内の氷柱

旧冬より降積る雪家の棟よりも高く春ふなりても家内薄暗き白昼高窓を埋る雪を掘のけ明をとることと前ふもいるが如し此

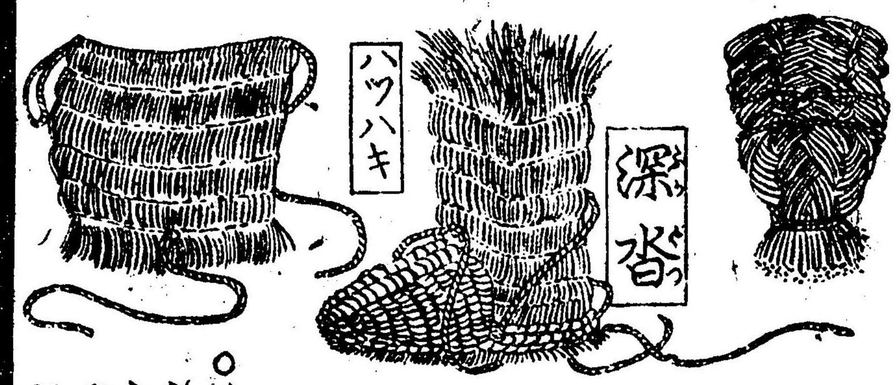
屋上の雪ハ冬のうちもたびたび堀のけて度々ハ木鍬ハ小さくたちたびたび屋上を損ずる事あり我国の屋上わらぶハ板葺なり屋根板ハ他国ハ比べ厚く廣く葺たる上ハ筭木といふ物を作り添石を置て鎮とし風を防の便とせり是ハ雪をわりのけとらんとてもはくもことなるべきその雪のうへハ早春の雪ふりつもりて凍ゆゑ屋根のゆぶきをもたびたび春も稍深なれバ雪も日あたりハ解あるゆハ焼火の所雪早く解るハいとうかの屋根の損じたる処木羽の下をくぐりゐどして雪水漏ゆゑ夜中俄ハ畳をとりのけ桶鉢のるゐあるをもとりをうべて漏をうくるもの処を修治とるハ雪全くきえざるゆゑ手を下ずして変なるべ漏ハ次第ハこたりて座敷の内ハいくもたりも大なる氷柱を見る時あり是暖国の人ハ見せまくぞおもふ

百樹曰余越遊して大家の造りを見るハ極の太こと江戸の土蔵のごとく天井高く欄間大なりとて雪の時明をとるとあるなり戸障子骨太くして手足夫るゆゑ國鴨柄も廣く厚く大材を用る事目を駭せりこと皆雪ハ潰ざるの用心なりとぞ江戸の町ハいハ店下を越後ハ雁木敲ハ雁木の下廣くして小荷駄を率べきなりとハ雪中ハ下を往來の為なり余越後より江戸へ皈る時高田の城下を通しぶたハ北越第一の市會なり商工軒をならべ百物備ざるなしと両側一里余庇下つづきなるその中を往こと甚意快なりき文墨の雅人も多くとき〻しが旅中年の凶荒ハ遭皈家をゑ湖を入るぎりしハ今ハ遺憾とせ

○雪中歩行の用具

雪中歩行の具初編ハ其圖を出しハ製作を記さざるゆゑ

その詳なるを示す



○藁沓は藁にて作りあむ常の鞋のまく足をそなへて雪中ふ歩行して他の坐ふつく時足をそなへふもつぶ

○他国ふハ革ゆ作りあるを見る泥行ゆハ便あるべし

我国の雪中ゆハ途ふ泥あるゆ而ゆ一ゆもあるふ牛のつめゆ

げたの外ゆ一名もあり男女の用ものゆ別もうハ是ごとのこと

さるべし名もあり

図せず

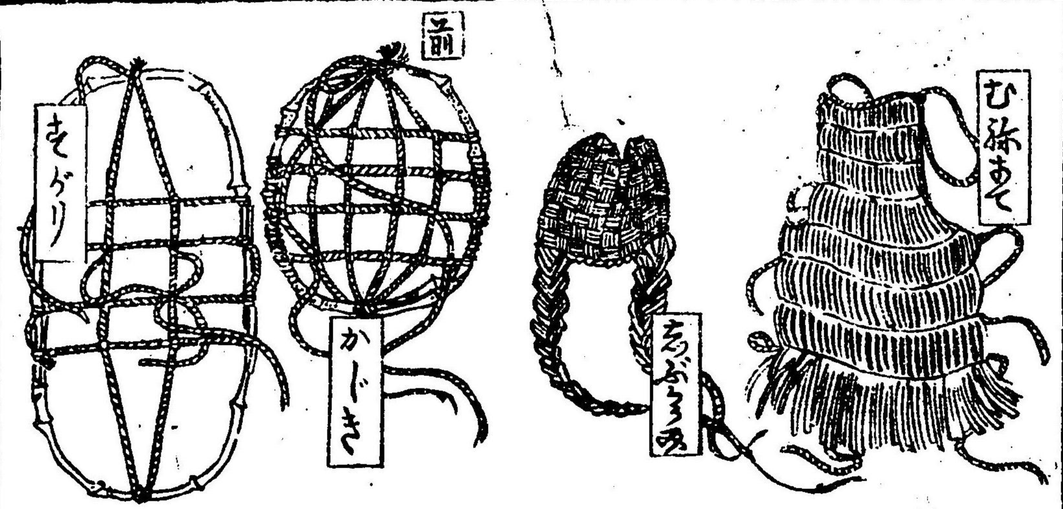
○ハツハキとしるハ俗のとるへあり是のうち裏脚あり

めるこあるハ蒲ゆ作る雪中ゆ用ふ

うゆ作るこ用ふ作りゆ圏を見る大略を知るべし

ゆもつ〳〵ゆ常ふも用ふ作りゆ圏を見る大略を知るべし

雪のえきものゆ大ふ〳〵ゆて作る



○シナ皮とそ深山ふある木の皮ふ作る寸尺八身ふ進

作る六〳〵ゆて二尺三寸ゆて二尺ゆり

ふ前より吹つる雪をふもぐゆふ用ふ農業ゆハ

常ふも用ふ他国ふもあるあり

○シブガラとハあをゆの方を腫あて左右の

ゆを足頸〳〵て作るあり里俗ゆ屠

ゆ〳〵ゆるをシビとふとのシビゆ作り足ゆ

かゆ〳〵ゆ名ふシビガラとふ〳〵きをシブガラ

ゆと訛りふあり

○ん蓑ハ古訛あり里俗かごきとふ〳〵て一尺二三寸

よと七寸五六分形圏の如くシヤガラとふ木の枝ゆ

作る鼻ふ〳〵クマイブとふ蔓又ハカツラとふ

つるをも用ふ山漆の皮ふ巻ふ是ハ

前ふ圏しるあり皆の下ふ〳〵ものゆ雪ふ

○きりハ〳〵て二尺五六寸より三尺余横一尺三寸山行

をなるて作る。かごき。きりの二ツハ冬の雪の

ゆ〳〵ゆの時ゆ〳〵ゆ用ふ〳〵つけ人ハ一

見るあり

右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種〻雪中歩用の具あまたなり
雪の国に用ふる物に似たるハ多く省く

百樹曰奈
北越に遊びて
牧之老人が家に
在し時老人
家僕に命じて雪を漕
形状を見せしる京水傍に
ありて此圖を写り寄物ハ
○橇○縋あり戯に寄てしるす
一歩も進ことあたハざる家僕があるも馬を御するがごとし

○轎

字彙禹王水を治し時載する物四ッあり水に舟陸に車泥に轎山に樏書径志るしハ此轎とハ唐土の上古よりありしそう
彼ハ泥行の用なるべ雪中に用ふるとハ製作異なるべし轎の字○蔬○橇○秩馬諸書に散見せ或ハ○雪車○雪舟の字を用ふるハ俗用なり

そもそも此轎とハ物雪国第一の用具人力を助事船と車に同く且に作る事最易きハ圖を見て知るべし堀川百首兼昌の哥に
初深雪降ぬけ〻るあるもち山越の旅人轎ふのるまで
この哥をよむ
我国に雪を作るハの古を志るべし前ゆもまぐ〻らへるごとく
我国の雪冬に凍ざるゆゑ冬に轎をつくるハ雪ふもちらり〻擿ことあ
ら〻轎ハ春の雪鉄石のごと〻凍る正三月の間に用ふべきものと

其時ハいるを里俗輜道ハ[illegible]
俳諧の季寄ハ雪車を冬とするハ誤りなれとも雪中の物なれば
春の季ハ似氣なり　古哥ハも多くハ冬ハよりて實ハたゞ[illegible]
冬として可なり
輜ハ作り易物なれとも農商家毎ハ是を貯ふさゝ載るものハ
[illegible]大小品々あれとも作り様ハ皆同じ[illegible]名も又[illegible]
大なるを里俗ハ修羅とて大石大木をのせるなり
山くの喬木も春二月のころハ雪ハ埋りたるが梢の雪ハ稍消て遠目ハ
見ゆるに此時薪を伐ハ易けれ農人等ハ輜を拖て山ハ入る或ハ
そりをハ縛ハ置もあり常ハ見上る高枝も埋りたる雪を天然の足
場として心の侭ハ伐とり大々ハ六把を一人もてとるなりさて下ハ三把
を並べ中ハ二把上ハ一把とをを縄ハ強く縛り縛ハ臨ぐ蹉跌ハ

東る雪の上なれば幾百丈の高も一瞬の間ハ[illegible]を輜ハ
のせ[illegible]或ハまた山ハ九曲ある中ハ件のごとくハ傳[illegible]る薪の
輜ハ乗り片足をあてゝ是ハて揖をとり舵を走らごとくして
難所を除く数百丈の麓ハくだる一ツも過ことなく其術学ぶべし
自然ハ得る処奇妙なり
輜を引て薪を伐ことハ[illegible]行ときハ二三人の食を草ハて編
きたる袋ハいれて輜ハ[illegible]とあり山鳥ハとをとりて[illegible]
ことあるたとりハ[illegible]焼飯ハせんとて打より見れば一粒もなきに鳥
どもハ樹上ハあり[illegible]啼人ハ[illegible]鳥を眺て罵り空肚をかゝへて
輜哥ハいでゝ輜をひきて[illegible]事もあり[illegible]その人のなりき
そりをひくハ[illegible]是を輜哥とて[illegible]ち樵哥あり

唱哥の節も古雅なるものなり親あるひは夫山ふのり輜を引てうへる
ふ遠く輜哥をきて親夫のうるをきり輜ふ遇処すぐむつかしで親夫
をび輜ふ積る薪ふ跨せ妻や娘ゲをひきつこてもて又輜哥を
うたうてうるるど質朴の古風今自前ふ存せり是繁花をきらざる遠
僻の地なるゆえなり

春もやや景色ちのうとらひひ梅も柳も雪ふうづもれて花も緑も
あるうのきうふくるやくさるど二月の空ハさるぶふあをきてりて朗なるの
窓のもとふ書讀をりもも遥ふ輜哥の聞ふらるふも春めきそうと
是ハ我のこふあるもど雪国の人の人情ぞ

百樹曰我ゲ幼年の頃ハ元日のあさより扇ると市中をうるあ
りくこ声あるひハ白酒くの声も春めきて心も朗なりしゲ此声
今ハなくなり鳥追の声ハさるなり武家のつぎて町ふ遠所ふハ

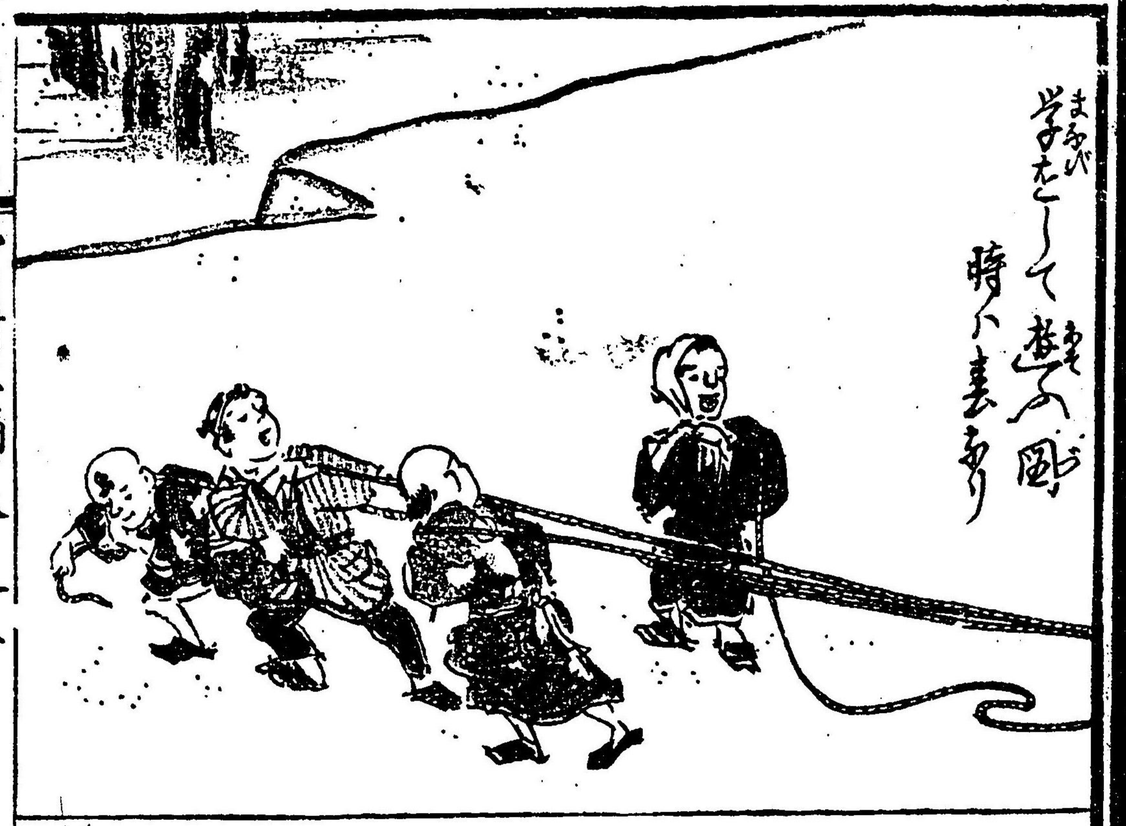
江鱈の鮨鰯のもくとうる声今もあり春めくるものと三月ハ
接草うる声ふ花をかるひ五月ハ鰹くふ白妙の垣根をきてふ
七夕の竹ヤくハ心涼くく師走の竹やくハもたたふ竹うり聞ふ忙物皆
季ふ應じて声をなくく情ふ入る事天然の理なり胡笳の悲も又
然くん件のハ人の声なりきくて春の鶯あるひハ蛙夏の蟬秋
の初雁鹿虫の音冬の水鶺鴒や本編輜哥をきて春めきそう
きくとハ真境實事文客の至情なり我是ふ感じてこふ数言
を置く輜哥の春めくことふ江戸人ふハもひもよらざる奇情なり
ことふ似る事猶諸国ふもあるべく

糞をのもる輜ありことをのもるゆえふ小く作りる物なり二三月の
ころも地とくく雪のくぶるハなくく凍くくくく田圃も是下ふ在りて持
分の境もさくふりくくぐくくきるふかの糞のそりを引くくふ来り

秋月庵牧之著

児童垂氷を輜のセ大持の

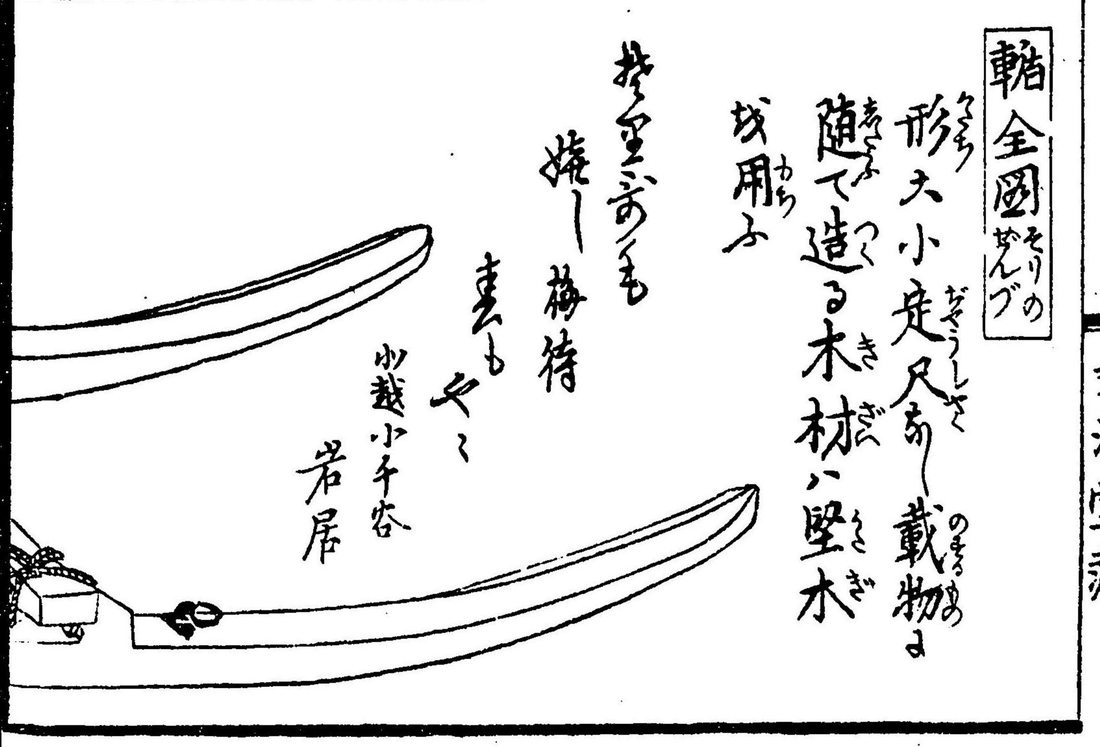
学たして遊ぶ風情時ハ妻あり

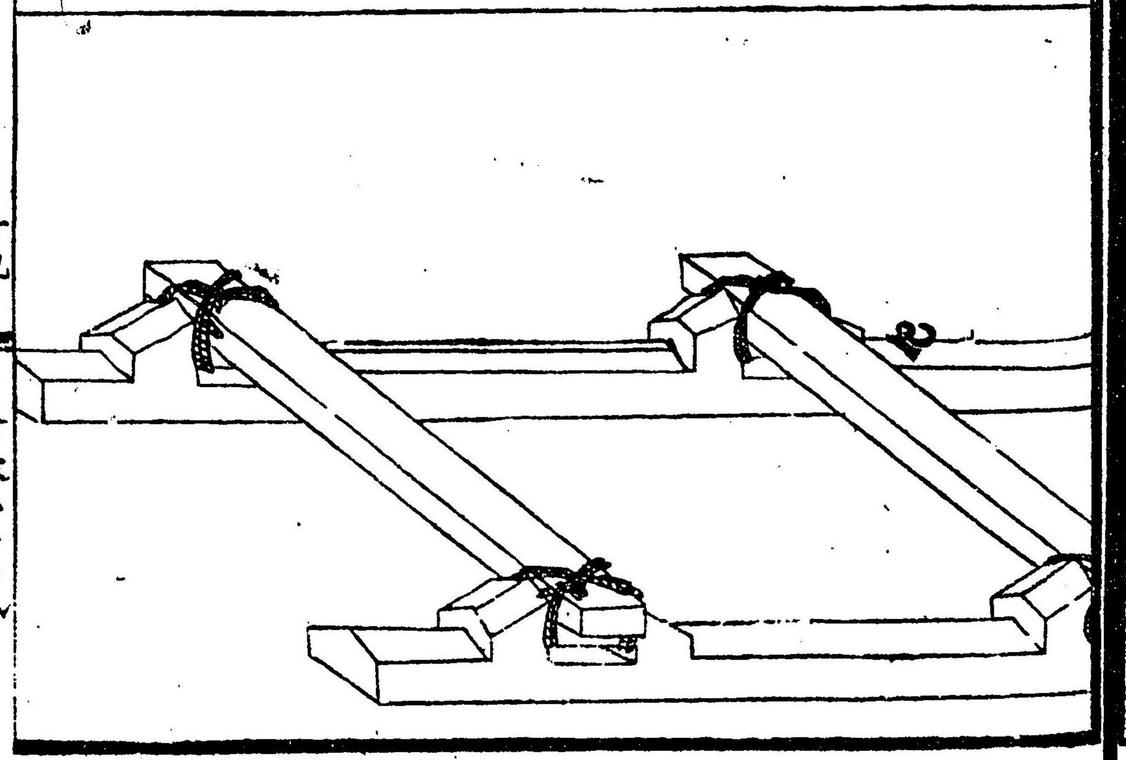


輜全図

形大小疋尺有て載物ゑ随て造る木材ハ堅木

或用ふ





雪のなかに一点の目標もなきに雪を掘こと井を掘が如くにして糞を入るゝに我田の坪にあたる事一尺をもたがへず。これ我が農奴等もする事なり。訛りて雪上何を目的にしてかくはするぞと問ひしに目あてとする事はしらねども心にこゝぞとおもふ所その坪にあたる事なしといへり。所為は賤けれども芸術の極意もこゝにあるべくぞおもはるゝゆゑにこゝにしるして初学の人芸に進の一端を示す。

轌の大なるを里言に修羅といふ事前にもいへりごとく大材木あるひは大石をのせてひくを大持といふ。ひとゝせ京都本願寺御普請の時末口五尺あまり長さ十丈あまりの欅を挽し事ありき。かゝる時は修羅を二ツも三ツもかくるなり。材木は雪のふらざる秋伐りてそのまゝ山中におき、轌を用ふる時にいたりてひきいだす。かゝる大材をも挽をもつて雪の堅をしるべし。田圃も平一面の雪なれバひくべき所へ直道にひきゆくゆゑ甚弁なり。修羅に大綱をつけ左右に枝綱いくそぢもあり、まつさきに本願寺御用木といふ幟を二本持つ。信心の老若男女童等までも蟻の如くあつまりてこれをひく。木やり音頭取五七人花やかなる色木綿の衣類に彩帋の麾採て材木の上にありて木やりをうたふ。その哥の一ツにハア「うさぎ〳〵児兎ハア「わが耳ハなぜながいハア「母の胎内にいた時に笹の葉をのませてハア「それで耳がながい「大持がうごかんバハア「花の都へゆりだしさ。同音に百人「ひゝとう〳〵「そのこゑさまさまびやつてさ「ひゝとう〳〵。児曹らが手遊の轌もあり。氷柱の六七尺もあるをそりにのせて大持の学びをなし、木やりをうたひ引あるきて戯れあそぶなど暖国ゆゑあまりに聞もせざる事なるべし。猶轌に種々の話あれどもさのミハとゞめてしるせり。

○春寒の力

春ふかくなるに寒氣地中より氷結あがるちの力礎をあげ〻椽を反〻あるひハ踏石をも持あげる冬ハいろゐど寒ぎるとも かゝる事なく さまでとも雪も春ハ凍て輔をもつゝみ屋根の雪を搗のけてつゝ上げ〻を里言ふ掘揚といふ前ゆき往來の路ゆも掘あげあり〻山をなすもゆゑ春雪のこゝろふかくなるの雪の山ふ箱撰のごとく階を作り〻往來のたよりとなるの所ゆゑふ下踏の齒ふ釘をなべ打〻蹉跌ざる為とも唐土ふてハ是を樔といふ山ふのぼるふまづ〻ぎる履とも樔和訓カンジキとあり

○シガ

冬春ふかぎ〻ぞ雪の氣物ふふとく霜のおきるゆゑふある是を里言ふシガとなの戸障子の隙よりも雪の気入り〻坐敷ふシガをなす時あり此シガ朝曙の温気をうくる処の解〻おつる春の頃野山の樹木の下枝ハ雪ふうづもるとも梢ハ雪の消るふシガのつきるハ玉りて作りなる枝のゆゑ〻見事なるものあり川辺などとて〻〻者ふハ髪の毛ふもシガのつく事あり此シガ我が塩沢ふハまことあり小出嶋あり〻ふハ多〻大河ふ近きゆゑ水氣の霜となるゆゑ岩あん

○初夏の雪

我国の雪里地ハ三月のころふいとゞ次第〻ふ消朝〻ハ凍て鉄石の如くなるゆゑ日中ハ上よりも下よりもきゆる月末ふいとゞ目ゆる留るゆゑふ昨日今日と雪の丈け低くなりなゆ雪も降まゝと雪明りと取のけ家のわたり庭などの雪をも掘まつるふ雪凍り〻堅きゆゑ雪を大鋸ゆ〻大鋸。里言ふひきとりまつるその四角なる雪を脊負ひあるひハ擔持ふもるなど暖国の雪とハ大ふ異り雪ふ枝を折まゝと杉丸太をとゝ〻ちぎり〻げあきさる庭樹なども解ねどけハさもぶふ梅も

雪の中に蕾をふくみて春待ちわびたる春の末なり此時にいたりて去年十月以來暗うして坐敷もやうやく明るくなりて盲人の眼のひらきたる心地せらるゝ雖ども桃の節供は名のみにて花はまだうゑざりし四月にいたりて田圃の雪も斑にきえて去年秋の彼岸に蒔たる野菜のみる雪の下に萠いで梅は盛をすぎ桃櫻は夏を春とする雪に埋りたる泉水を掘いでゝ去年初雪より以來二百日あまり黑闇の水のみにふかりし金魚緋鯉なんどうまれげに浮泳するこゝろもとやとらへゝ五月にいたりても人の手をつけざる日蔭の雪は依然として山をあるせり況や山林幽谷の雪は三伏の暑中にも消ざる所あり

○削氷

百樹曰余丁酉の年の晩夏豚児京水を從へ北越に遊ぶ時三國嶺を踰しは六月十五日なりしに谷の底に鶯をきゝて

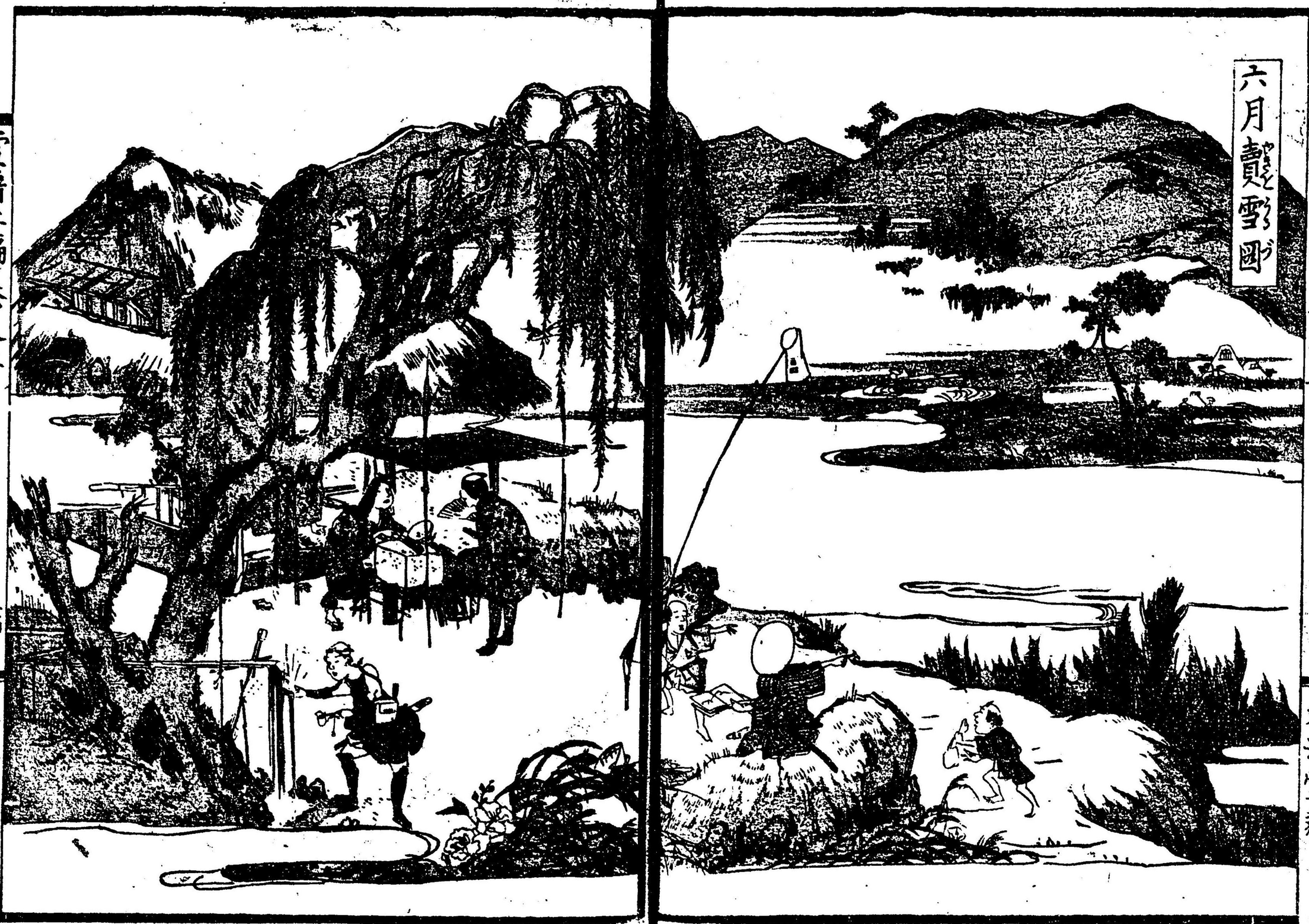
見るに谷を隔てゝ越の山ぶゝ拙作のまことも實境なるべし記も此嶺にもとゝ四里山徑隆崛して數武も平坦の路を踐ぬ淺貝といふ駅に宿り猶○二居嶺二里を越て三俣といふ山駅に宿し芝原嶺を下り湯沢に抵んとする途中遠に一掘の茶店を見る庇のもとに床あり淺き箱中のものに白く方なる物を置とは遠目にも石花菜を賣なんと口中上ずぞとも思ひなるべし山をまたぐ暑もさけ〳〵汗もちぬぐに足もつゝまでゝ茶店あるうれしゝ京水とともに入りて腰をうけかの白き物を見るべきところてんにあらずして雪の氷なりけり六月に氷をうる事江戸の目には最珍しけれども立ちよりて熟視ば深さ五寸計の箱に氷をいれたる中に小き踏石ありこの雪の氷を賣茶翁に問ばこれは山蔭の谷にあるなりなるべ

きくめんといふさくさくもひろまぶ菊菜刀を把盗のあくさく
と音くて削りいまと豆の粉をうけくいでもり氷小黄な粉をうけて
ふ江戸の目ゆ見も慣ぞ可笑けまぶ京水と相目くて笑をおのび
つ是ハ價をとくとくて今もくまで豆の粉をうけざるをとくく両
掛小用意くてる沙糖をうけてる削氷小歯もうくぞり暑を
ものもくこのけづり氷とふ物を珍味ともする事古書小散見せ
その中小定家卿の明月記小曰『元久二年七月廿八日途より和
哥所小参る家隆朝臣唐櫃二合を取寄らる○破子○凡○土器
○酒等あり又寒氷あり自刀を取り氷を削て奥小入る事甚し』
本書ハ漢文件の元久二年乙丑より今天保十一年まで凡六百三十余年を
歴て古人の如く削氷を越後の山村小賞味くる事珍とすべく

奇とすべく實小好古の肝を清くも
○按小ひとふ氷の本訓とりと訓ハ寒凝の義ありと土清翁ゲ和
訓栞小らり氷室とふ事俳諧の季寄とふものゆどゆるもえ
ふ普人の知りたる事ゆく周禮ゆもいでまぶ唐土のむくゆる
ありくとあり

御国ハ仁徳紀小見えまぶその古きを知る
でくて延喜式小山城国葛城郡小氷室五ヶ所をいでせり六月朔日
氷室より氷をいでくて朝庭小貢献をを諸臣小も頒賜事
年毎の例ありくあり前小引くて明月記の寒氷ハ朝庭より
の古例の賜小ハあいでくぞいふんとあまぶ削氷を賞味せくまくハ
七月廿八日あり六月朔日小なりとる氷七月廿八日まで消ぞあり
べくと明月記ハ千写百摹の書あまぶ七八六の誤とくても氷室を
出くて六月の氷朝を待べくぞ蓋貢献の後氷室守ゲ私小出せる

六月鸛雀圖



なるべからず○さて氷室とハ厚氷を山陰などの極陰の地中に藏置屋を作りおけて守らせ古哥にもよめる氷室守是なり其氷室ハ水の氷凍をとゞめおくゆゑに諸書の注訳にも見えしが水の氷なるハ不潔なり不潔をもつて貢献せんハあるべからず且水の冰ハ地中に在りても消易ものなり是他なし水ハ極陰の物なれバ陽に感じ易ゆゑなり我越後にて削氷を視て思ふにかの谷間に在といふハ天然の氷室なりむかしの氷室といふハ雪の氷りたるなるべし極陰の地に窖を作り屋を造り掛別に清浄の地に垣をめぐらして人に踏せず鳥獣にも穢させず而雪を待雪ふりたるハ此地の雪をかの窖に擣こみ埋め人是を守り六月朔日是を開最清浄なる所を貢献せしなるん欤是已が臆断を以て理に就て古の氷室を解するなり

○氷室の古哥枚挙べからずかの削氷を賞味し玉ひつる定家に

拾遺愚艸「夏かげの秋風ならぬ氷室山にてぞ冬をのこせとおもへバ」

又源の仲正に　千載集「下さゆる氷室の山のおそ櫻きえのこりける雪かとぞ見る」この哥氷室山のおそ櫻を消残りたる雪に見えたる一首の意氷室ハ雪の氷なるべくぞおもはるゝ今加州侯毎年六月朔日雪を献じ玉ふも雪の氷なりとぞこれも古の氷室ハ雪の氷なるをおもふべし○さてかの茶店にて雪の氷をめづらしとおもひしにその次日より塩沢の牧之老人が家に在しに日毎に氷くとよびて賣来る山家の老婆などあり掌などなるを三銭にうるなれバ二三度賞味せしがのちにハ氷とてもめづらしからずとぞ物の得がたきハ珍らしく得易ハめづらしからず人情の恒なり塩沢に居て六月の氷のめづらしからざりしをおもへバ吉野の人ハよしのゝ花ともおもはじ松

嶌の人ハ松嶌の月とも称すべきなるべし飽ざる物ハ孝心ある我子の顔と藏置黄金の光なるべし

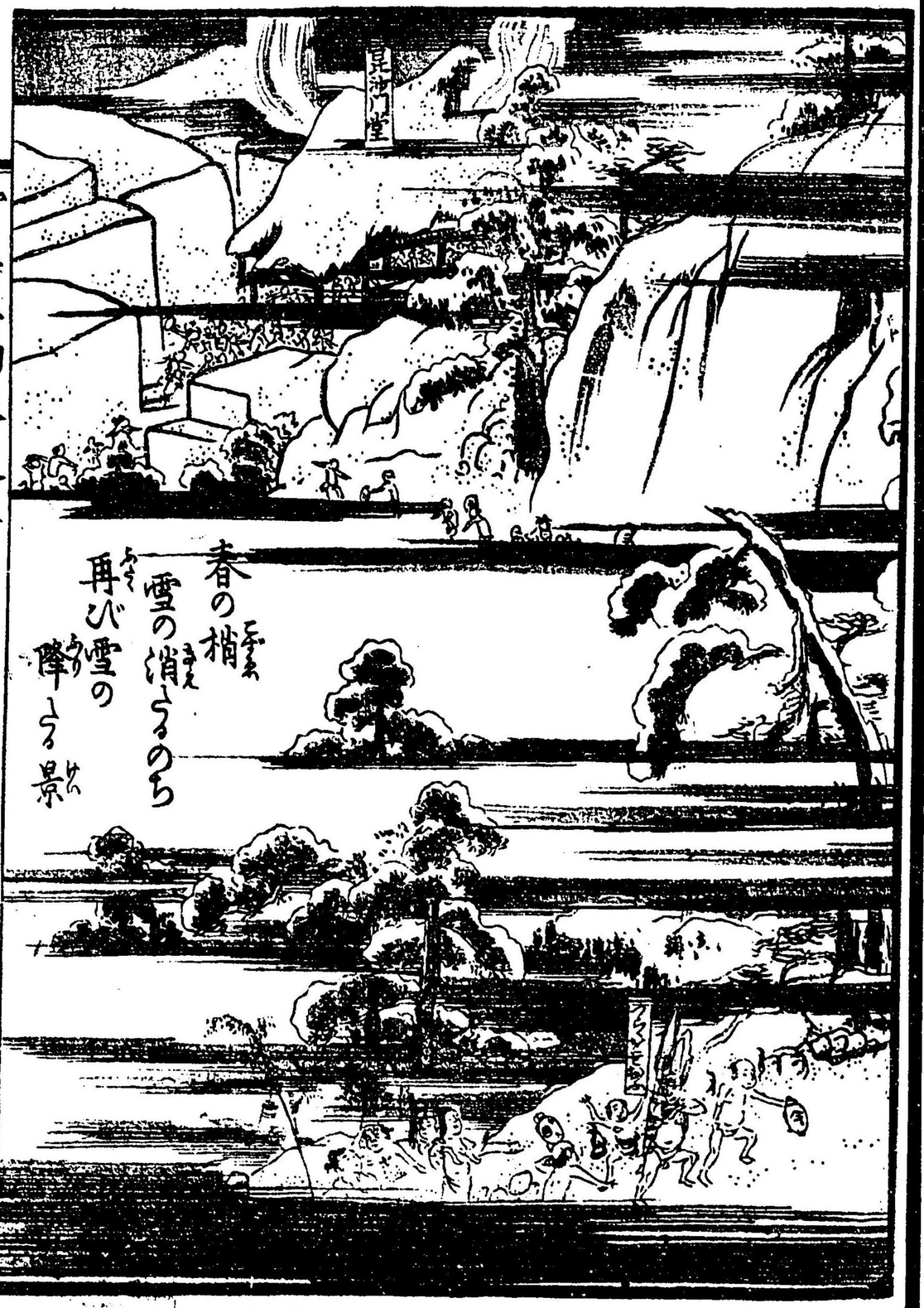
○雪の多少

越後国南ハ上州ニ隣る魚沼郡なり東ハ奥州羽州ニ隣る蒲原郡岩船郡なり国境ハいづれも連山波濤をなせる雪多し東北ハ鼠ヶ関岩船郡の内出羽の西ハ市振頸城郡の内越中の境ニ至の道八十里ヶ間都て北の海濱なり海気ニよりて雪一丈ニ及ぶ年ニよりて多少あり又消ること早し頸城郡の高田ハ海を去事遠ケれども雪深し文化のころ大雪の時高田の市中町のうづき一丈ニ及ぶ雪ニ埋りて晝夜のごとく昼夜をわかぎる事十余日市中燈の油尽て諸人難義せしニ御領主より家毎ニ油を賜ひし事あり此時我塩沢も大雪ニて夜昼をわかぎ家雪ニうづまりて日光を見ざる事十四五日連日家うづまり雪をうるのみにて人気鬱悶して病をなすものもありけり

百樹曰余牧之老人が此書の稿本ニ就て増修の説を添上梓の為ニ備書へ授る一本を作るをりしも老人が寄る書中ニ

「當年ハ雪遲く冬至ニ成ても駅中の雪一尺ニ及ぶこと此日次ニ六今年ハ小雪なりと諸人一統悦び居ル所ニ廿四日十月黄昏より降いでゝ廿五六七八九日まで五日の間昼夜ニつゞる事もなく一丈四五尺ニも及ぶ申ル毎年の事なれども不意の大雪ニて廿七日より廿九日まで駅中家毎の雪掘ニて混雑して警外急玉山を築戸外ニいでゝ悃り申ル今日も又大雪吹ニ相成家内暗く蠟燭ニて此状を書て申ル何程可降哉難計一同心痛いたし居申ル」下略是當年天保十年十一月廿九日出の尺翰なり此文をもつても越後の雪を知るべし

○余越後の夏ニ遇ひしニ五穀蔬果の生育少くも雪を畏る色なく山景野色も雪あ


毘沙門堂
春の梢
雪の消るのち
再び雪の
降る景

佐浦詣堂押圖

りしとかぞふるに雪の浅き他国ハ同じ五雑組ハ天部百草雪を畏ぎ〳〵霜を畏る蓋雪ハ雲ハ生じ〳〵陽位也霜ハ露ハ生〳〵陰位也とかぞふり越後の夏を視て謝肇淛が此説ハ伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方へ二宿越て六日町浦佐とかぞふる宿ありてハ普光寺とかぞふる真言宗あり寺中ハ七間四面の毘沙門堂なり傳へかぞふる此堂大同二年の造営なりとぞ修復の度毎ハ棟札あり今猶歴然と存る毘沙門の御丈三尺五六寸往古椿沢とかぞふる村ハ椿の大樹あり〳〵を伐て尊像を作りしとぞ作名ハ傳らずとぞきてぬ像材椿なるをもつて此地椿を薪とせるとぞかぞふるとぞ崇ありゆゑハ椿を植ぞ又尊昊鳥を捕を忌玉ふゆゑハ諸鳥寺内ハ群をなす〳〵人を怖ぞ此地の人鳥を捕うあるハハ喰ば立所ハ神罰ありたとひ遠郷へ聟嫁ハゆきて年を歴ても鳥を喰ものなれば必凶應あり霊験の黙くさる事此一を以て知るべし〳〵さるば遠郷近邑信仰の人多〳〵もつとも此毘沙門堂ハ於て毎年正月三日の夜ハ限りて堂押とかぞふる事あり敢祭式の礼格とかぞふるハ有来る神事なり正月三日ハもとより雪道なれども十里廿里より来りて此浦佐ハ一宿〳〵此堂押ハ遇人もあるべ近村ハハかぞふるなり

○さて押ハ来りし男女まづ普光寺ハ入りて衣服を脱て身ハ持る物もなべてハ置棄婦人ハ裕衣ハ細帯まとゐ生るべ男ハ皆裸なり燈火を點ずるところの七間四面の堂ハ裸の男女推入りて錐をたつるの地なし余も若かりしとき一度此堂押ハあひしが上へあげる手を下へさゞる事もなるべ逼り立けり押とかぞふハ誰ともなくサンヨウ〳〵と大音ハ呼ハる声の下ハ堂内ハ充満する老若男女ヲヽサイコウサイとかぞふりて北より南へどろ〳〵と押又どろりて西より東へ

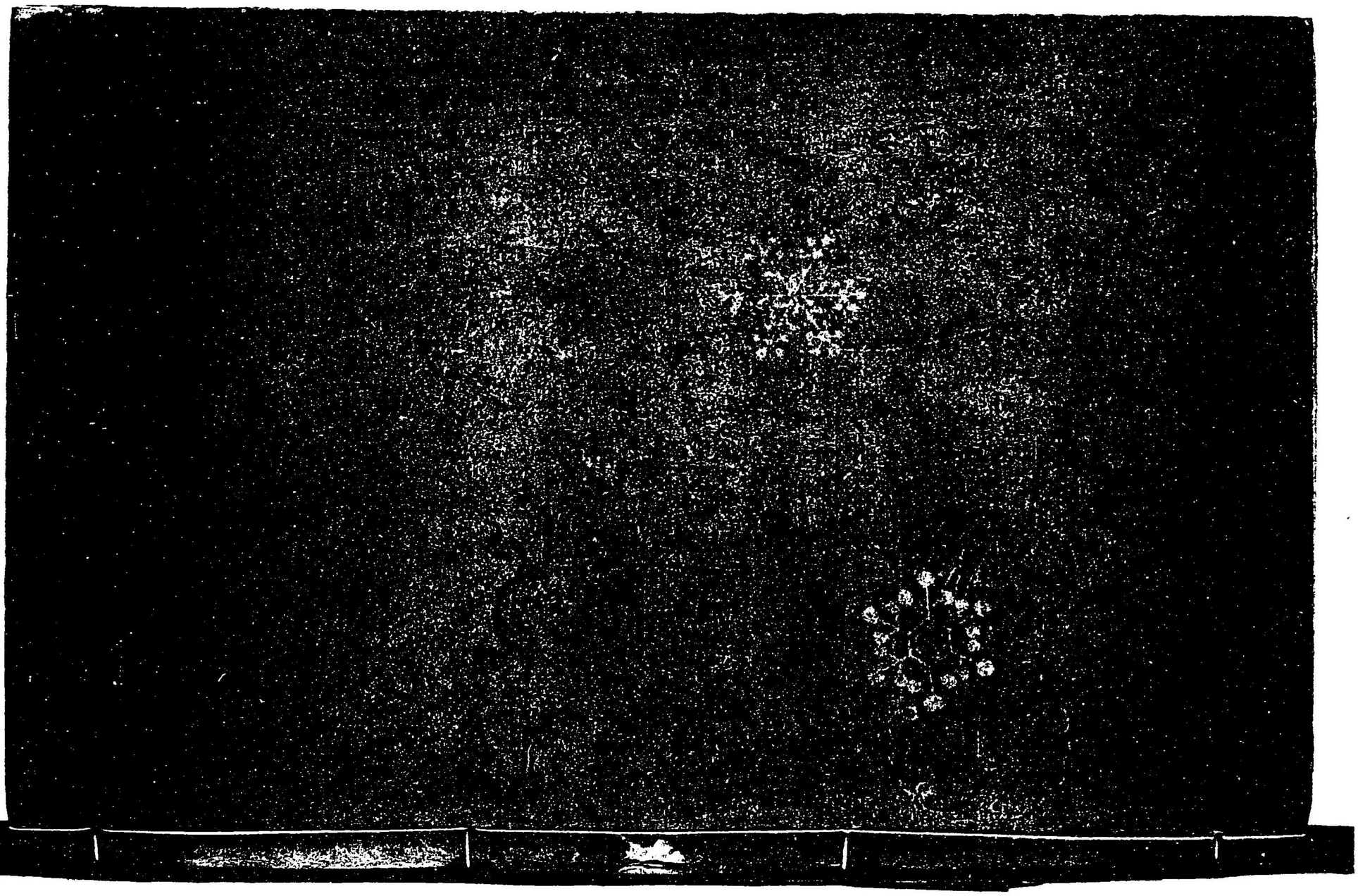
ゆゑなき此一ゆゑ男女俱ふ元結おのづからときて髪を乱す是甚奇なり七間四面の堂の内ゆゑ裸なる人ときゆゑあげる手もおろせ事なりぬるゆゑ人の多きさとりまぐれ此諸人の氣息正月三日の寒氣ゆゑ烟のごとく霧のごとく照せる神燈もことゆゑ為ふ暗く人の氣息屋根うちふ露となり雨のごとく降人気破風よりもえて雲の立のぼるが如く婦人稀ふ小児を背中ふむすびつけ押も有ども其の小児啼ことなくも常とちがの不思議なり況此堂押ふいさらも怪異をうけて者もうり一人もなく婦人のなかふ湯具だにもなるもあるとゆゑ闇処ふ咲雑しく一人もなぐりかなしき事をせずこと物くに毘沙門天の神罰を怖るゆゑなり裸なる所以ハ人気ふく堂内の熱たることと燃がごとくなるゆゑ願望ふよりてハ一里二里の所より正月三日の雪中寒氣肌を射ごとくなるゆゑ厭ぜ柱のごとき氷柱を裸身ふ

浴び又押ふ入るもあり一ト押ふて息をつぎ七押七踊ゆゑ止を定とす踊とは桶の中ふ半を注ぎ入ゆゑ人ときる満身ふ汗をなげ第七をどり目ふいたりて普光寺の山長耕夫の長老ふ手ふ鼓を持人の手輦ふ乗て人のなかへ入り大音ふ「毘沙門さまの御前ふ黒雲が降さモウ紫人」「なんどとくさぐつさ」山男「米がふるとくさぐつさモウ」とさらをもりなるべく此さら内へ撒ハ内作なるべく外へとちりなるべく又志願の者兼て普光寺へ達しておく小桶ふ神酒を入て盃を添て献ぜ山男挑燈をもりて人をもつて者廿人ばかりさきふもちて堂ふ入る此盃手ふ入ればハ幸あるべく人の傳をなすべく取んとて神酒ハ神ふ供ぜる状なるべく人ふ散べく盃ハ人の中へ撒ることを得る人ハ宮を造りて祭る其家なるべ

139
7
146

おもはざるの幸福あり此てうちんを奪ひ奪ふうゝを破るその骨一本とりとる田の水口さゝ〜おけばこの水のかゝる田ハ熟實虫のつく事うゝ神夫のあゝとうゝ事あるゝ神人の知る所なり神事をつゝしび人〻離散〻〻普光寺ふ入り初兼置る衣類懐中物を視るふ鼻帝一枚ぞふ失る事うゝ掠とび即座ふ神罰あるゆえうりゝさて堂内人散〻〻後うの山長堂内ふ芋幹をちゝし出〻夏例うり翌朝山長神酒供物を備ふ後さゝふ進ゝ棒〻正面ふもゝを神の忌のうゝ昨夜ちゝ〻ゝとる芋幹す断ふ折〻〻あり是人散てのち諸神ちゝふ集りゝ踊玉ふゆえをぶゝを踏をり玉ふりとらひつゝふ神事ハもゝ〻児戯ふ似ることゝ多〻ゝもゝとゝも凡慮を以ゝ量識ゝ〻ゝ此堂押ふ類せゝ事他國ふもあるゝ姑記〻〻類を示せ

北越雪譜二編巻之一終



139
7
146

東京圖書館

和書門	地理類	二九函	四一架	一四六號	七冊